

観点別学習状況の評価（A～C）の事例とその評価基準

1 評価のねらい

今回は、物理基礎分野における「運動の法則」についての応用課題に対する評価の事例研究を行った。本時の重点目標は「主体的に学習に取り組む態度」とし、運動方程式の応用課題について、一人またはグループで取り組ませる。応用であることを鑑み、問題を解く技術や表現等の習得ではなく、自ら問題を解決しようとする姿勢を養うことを重点目標とした。「簡易版振り返りシート」による生徒の自己評価と、机間指導等における行動の観察に基づく教員による評価の二つの方法から総合的に評価を行った。

2 評価基準 【主体的に学習に取り組む態度】の評価

A 教員による評価（下記(1)）と生徒による評価（下記(2)）の両方が a である。

B A, C 以外の場合。

C 教員による評価と生徒による評価の両方が c である。

※Cの場合の改善策：導入方法の工夫・課題の難度や出題数の見直し・解説の分かりやすさ・日頃からの声掛け等を通じて、苦手意識のある生徒や課題解決に消極的な生徒が少しでも興味・関心を持ち、主体的に学ぶ意欲がもてるよう授業の精度を上げる努力を行う。

(1) 教員の評価基準

a 課題に取り組もうとする積極性（課題に対し試行錯誤を繰り返す・教科書や資料集を調べながら取り組む、グループで活発な話し合いをするなど）が継続的に見られる。

b a, c 以外の場合。

c 課題に取り組もうとする姿勢が消極的である。

(2) 生徒の自己評価基準

a 最後まで積極的に取り組むことができた。

b ある程度は積極的に取り組むことができた。

c 積極的に取り組むことができなかった。

3 評価の状況

生徒の活動状況は、終始一人で取り組む、始めからグループで取り組む、しばらく一人で考えた後に分からないところを他の生徒に聞くなど、さまざまであった。また、応用課題に挑戦することで、作用・反作用の法則やいろいろな力などの基礎知識を復習する姿も見られた。課題への取組を通じて、「主体的に学習に取り組む態度」の「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自ら学習を調整しようとする側面」の二つの側面を見取ることができ、「主体的に学習に取り組む態度」を育成するよい機会になったと感じた。

評価に関しては、多くの生徒が自己評価を a（a…29名、b…9名、c…2名）とし、主体的に取り組むことができた実感している。また、cと自己評価した2名について、教員による評価（a…14名、b…26名、c…0名）ではbであったことから、行動の記録からは特に消極的とは感じなかった。なお、今回の総合評価では、A…14名、B…26名、C…0名となった。

4 留意点

教員による評価はAとCをつけることで、比較的簡単に授業内で評価できるようにした。今回は、教員・生徒の両方からの評価を総合評価としたが、この総合評価はあくまで「授業評価」として取り扱うべきである。生徒自身による自己評価が自身の成績に反映されることは適切でないと思われるので、成績をつける際は、教員評価のみを用いるべきである。大切なことは、このような評価を行っていくことで、「主体的に学習に取り組む態度」の育成する観点を、以前よりも意識的に教科での指導に取り入れることである。また、簡易版振り返りシートなどから、生徒自身による学習の振り返りの機会とするとともに、学習の手応えや感想などから生徒一人一人の気付きや疑問等を直接知ることで相互にコミュニケーションをとり、今後の授業展開や授業改善の機会を増やすことが重要である。